

「助かった命」(50分)

対象/中学生・高校生

1. プログラムの趣旨

震災発生前、日常生活がそのまま続く、これが普通の生活と考え、災害について何の危機感ももっていない生徒は多かった。しかし、震災後に分かったことは、備えや、古くからの伝承や言い伝えを大事にしてきた地域は被災者数が少なく、多くのいのちが助かったことだ。今、被災者の作文を読み、震災の状況を知ることによって避難訓練を身近なものとする。その上で、震災を経験した筆者の考えを知り、感謝するところ、防災に対する訓練や心構えの重要性を知り、いのちをまもり、いのちをつなぐ手だてを考える。

2. ねらい

震災を経験した生徒の作文「助かった命」を読み、震災の状況を知ることによって、防災に対する避難訓練や心構えの重要性を知り、いのちを守り、いのちをつなぐとはどういうことかを考える。そして、防災で自分にできることを考えさせ、助かったいのちや周囲に感謝する筆者の成長を、自らのものとし、内面的な成長を図る。

3. 展開

段階	学習内容	教師の支援・指導上の留意点
導入 (10分)	①震災の時何年生だったのか。 ②「助かった命」の作文を音読させる。	・当時のことを思い出させる。 ・作文の音読。
展開 (35分)	③プリントを配布し、解答させながら生徒の理解を図る。 [発問内容] 3月11日、自宅で筆者はだれといたのか。 どのように避難したのか。 筆者の心情。 1年後の町の様子。 なぜ多くのいのちが助かったのか。 筆者が避難生活で何を感じたか。 筆者のことをどう思うか。 ④筆者自身が、経験から多くのことを考え、他者と関わり成長したことを感じ取らせる。	・プリントの解答をする。 ・書かれている事実から、筆者の思いを知り、被災者として考えたことを知る。 母と弟と本人の3人。 車で高台のトンネルに避難。(いつもの避難訓練の場所) 信じられない。泣くことも怒ることもできなかった。 津波の傷跡は残ったまま。 土地に伝わる代々の教えとそれに基づいた避難訓練のおかげ。 大きな絶望の中、大きな温もりをいただき、感謝すると同時に恩返ししたい。
まとめ (5分)	⑤本時の振り返り ・「助かった命」の作文から、防災について学んだことをプリントに記入させる。	・学習をふりかえらせ、考え学んだことをまとめさせる。 ・いのちをまもり、いのちをつなぐために、自分のできることは何か考えさせる。

作文：「助かった命」 岩手県立岩泉高等学校(平成24年3月卒業) 一三上 拓人

出典：「祈り」 東日本大震災の記録と手記 一岩手県沿岸被災高校と支援学校一

春休みの課外授業を終え、私はいつも通りのバスで自宅へ帰りました。小本に着いたのは午後の一時ころ。家には母と弟がいます。父は仕事。祖母はちょうど二週間ばかり介護施設のお世話になっている期間中でした。その当時中学三年生だった弟は卒業式を翌日に控えており、その予行練習から帰ってきたばかりでした。天気の良い日だったので弟はいつもの下校ルートから逸れてわざわざ水門の前を通ってきたそうです。

そのとき、私は昼寝をしていました。外が寒かったのと四日にわたる課外授業の最終日だったこともあり、ついほっとして寝てしまっていたのです。寝ていたのはこたつでした。今思えば、もしあれが夢だったならどんなに良かったでしょうか。

母の携帯の緊急地震速報が鳴り出すと共に、まるで電車に乗っているかのような、気の遠くなる揺れがおきました。終わる気配の全くしないその振動の中、私たち三人は初めのうちこそこたつの中へ頭を隠していたものの、だんだんじっとしていることに危険を感じ、自分と弟は窓を、母は玄関のドアを開けにいきました。部屋のもの全てが揺れ、高い棚に置いてあった写真立てが倒れ落ちてきました。そんな揺れが収まらないなか、外では避難警告のサイレンと放送が流れ始め、私たちは急いで避難の準備をしました。

開けたドアや窓を全て閉め、なんとか外の車に乗り込みました。私たちが逃げたのは高台のトンネル前の避難所です。以前から何度か大きい地震のたびここへ避難したことがありましたが、停電で津波の情報が得られなかったこともありましたが、なにせ津波なんて遠い昔の出来事だと思っていたので、準備はしたもののどうせ今回も来ないだろうなどと特に心配をしていませんでした。

初めはメールが通じていましたが、徐々に通じ難くなり、終いには圏外に。ラジオの入りも悪い場所でしたし、母の車がちょうど修理中で代車に乗っていたためカーナビも無く、ついに全く連絡が取れない状態となりました。友人が心配して送ってくれたメールにも返信できないままでした。そうやってなにもできないまま、ひたすらじっと警報解除を待っていると、突然たくさんの、重なった歓声のような悲鳴が車外からわあわあと聞こえました。津波が来たらしい、と様子を見ていた母が言いました。三人で急いで外へ飛び出すと、遠くにみえる水門のあたりで高い水飛沫が上がりました。そこからはもう一瞬でした。

信じられない幅と高さを持った波が、自分たちの暮らした町を喰らいつくすように呑みこみました。それは決して格好つけた表現などでなく、本当に生き物のようだったのです。波から遠かったせいか音も聴こえず、ただただ無音の水のかたまりが淡々と家々を破壊していく様はあまりにも不気味でした。本来ならありえない高さの場所に水面が見えます。茶色の波は避難所のつい手前の小学校の校庭までも池のようにしてしまいました。私の家は小学校のすぐ隣です。カメラを向ける人、嘆く人、泣き崩れる人、みんながその光景を眺めていました。

正直言って、私はあんなものを目の当たりにしても、突然すぎて何も信じられませんでした。泣くことも怒ることもできませんでした。弟も同じだったようで、僕たち三人の中で母だけが涙を流していました。

町を津波が襲ってからというもの、時間はひどくゆっくりと流れ、それにつれ各地の惨状や第二波、第三波の危険を伝える情報が飛びかい、不安はただただつのる一方でした。十七時半頃、私たちは二升石の親戚の家へ避難させていただくことになり車に乗ったまま避難所を後にしました。移動の際、一瞬瓦礫に埋もれた自分達の家が見え、その先に姿を変えた私たちの町の様子が見えました。今まで見たどんなものよりそれは気持ち悪く、悲しくなって吐き気もしました。海側の友人が心配でたまらなくなりました。そこで私はやっと津波の事実を受け入れたのです。

それから一年以上経った今でも津波の傷跡はまだ私達の町のあちこちに残ったままです。海側の景色はがらりと変わり、自宅のすぐ側にある小学校へは、まだ子供たちの声は帰っ

て来ていません。津波に家を奪われた多くの人が今も仮設住宅で暮らし、瓦礫は依然として海の目の前に積み重なったままでいます。しかし、私がこの小本での被災を通じて伝えたいと思うのは、土地の受けた被害の大きさに対して助かった命の多いことです。家や物より何より大事なものは一人一人の命であるというのは、この震災で身をもって感じた教訓であり、それを救ったのはこの土地でおじいちゃんおばあちゃんの代から伝わる長年の教えと、それに基づいた毎年の避難訓練でした。内陸の町に移り住んだ私は今もなお、大きめの地震が来るたびに荷物をまとめ高台へ避難する準備をしてしまいます。それはきっと今回の震災が無かったとしても習慣としてそうしていたでしょう。それくらい私達の身に染み付いているものなのです。災害はいつ誰に降り掛かるかわかりません。少し震災のタイミングがずれていれば、例えば私のおばあちゃんも施設にいる期間でなかったなら、避難の準備はあんなにスムーズにはいかなかったはずですし、その一方で、もし弟が水門の目の前を歩いている最中だったなら、弟の命はどうなっていたかわかりません。なにがどう影響するか分からない災害だからこそ過去の経験とそれをもとにした避難訓練がいかに命を守るのに大切かを学びました。これからは私たちがそれを伝えていく番なのです。

最後に。今回の震災では、避難生活の間様々な人に多くの支援をいただきました。身内はもちろん遠くの見知らぬ方からも本当に沢山の力を貰いました。本来ならこんな絶望はめったに無かったはずなのに、避難中もその後も、その絶望を吹き飛ばすほど大きな温もりをいただきました。支援してくださったみなさん、特に二升石のおじいちゃんおばあちゃんたち。本当にありがとうございました。いつか恩返しができたらいいなと思います。つい最近まで私はあの日々のことを忘れようとしていました。忘れることが前へ進むことであるとそう思っていました。ですが今はそうは思いません。受けた悲しみの大きさは人それぞれですが、それをまっすぐに別の、次の世代へ受け継ぐことこそが私たちのふるさとを前に進めることだと今はそのように思うのです。小本がもっと元気になるようずっと願っています。どこへいこうとそれは変わりません。